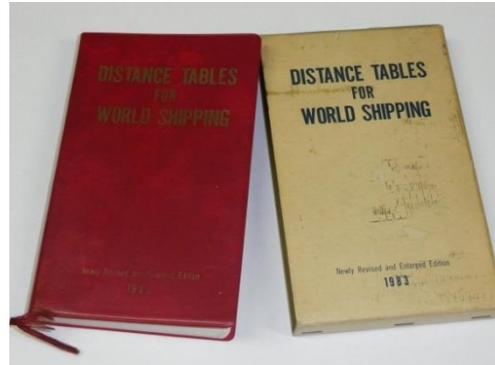
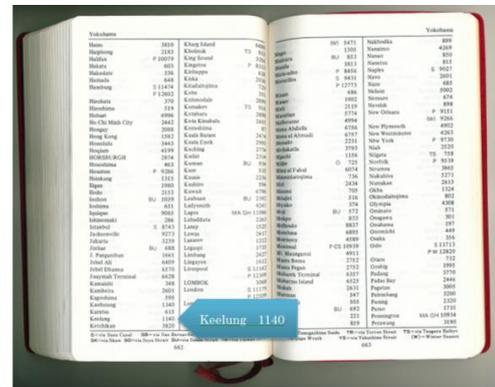


(4) 初めての外国へ

チョッサーから教えてもらったのだが、ディスタンス・テーブル(Distance Table=距離表)で調べると、横浜港から基隆港までの距離は1,140 マイルである。本船の速度が14.5 ノットとすれば計算上、3日と6時間37分であるが、潮の流れやドラフト(Draft=喫水)が下がっているので水の抵抗を考えると、基隆に着くのは四日後の早朝だろう。



パイロットが下船した後、パーサーから船内放送でシール・ロッカーを開くので各自購入したボンド品を取りに来るようにとの連絡があった。本船が処女航海の為、乗組員たちはボンド品の蓄えが無く、お酒も^{たばこ}煙草もみんな底をついていたので、乗組員たちは我先にシール・ロッカーに殺到した。これが処女航海でなかったら、どの港に着いても乗組員一人に付き、酒類が一本(約720ml)と、タバコが1カートン(10箱入り)のボンド品の使用が許されるのである。だから船員たちは、高い税金を払ってまで課税された煙草や酒を買うのは馬鹿らしくて、少し我慢を強いられていたのである。しかしながら航海中は、ボンド品がシールされていないので全くの無制限である。



俺もシール・ロッカーからブラック・ニッカ3本を貰って、自分の部屋に持って行った。しかし頼んでおいた『ロスマン・インターナショナル』と言う^{たばこ}煙草は船食に在庫が無かったので購入できなかったらしい。部屋に入ると、今日もオヤジがまた部屋にいるのではないか！オヤジには行く所が無いのか。ただボーとして、机に座っているのである。俺に見られたくない物でも有るのか。

俺はメス(Mess Room=メスルーム)に上がって行く事にした。



メスではボンド品の酒が手に入ったので既に宴会が始まっている。「サロン、ここに座れや。」湯沢ボースンが長椅子を叩いて合図した。「サロンはええやっちゃで一。なあ谷、お前にもサロンみたいな慎重さが一寸でも有ったらなあ。サロン、これからは谷の相談相手になったれや。」ボースンは結構酔っぱらっているのか、同郷の谷の事を心配しているようである。「ボースン、ボースンに言われる前に俺は結構谷と飲んでますよ。なあ谷。」「ボースン。俺は乙免なんかいらんわ。ボースンみたいになりたいんや。俺は勉強なんか苦手だって言う事ぐらい解ってるのに。ボースン、さあやりましょう。」谷も免税の酒がしこたま飲めるので、結構酔っぱらっている。ボースンは谷の事が心配で、谷には自分と同じ道を歩んでもらいたくないのが傍目からも良く解るのである。彼には是非ともオッサーになってもらいたそうである。

「サロン、氷を持って来てくれや。」チョッサーである。「はい、分かりました。」すぐさま俺はチャンバーに行ってアイス・ペールに氷を入れ、チョッサーの部屋に持って行った。「サロン、座りんさいや。」俺はただ氷を持って行くだけかと思ったら、一緒に飲もうと言うのだ。俺はまだガキなのである。誰が考えても俺みたいな若造がチョッサーの部屋で飲むのは変である。



(小型船のチョッサーの部屋)

無論俺には思い当たる節が無いではない。俺が高校時代にスポーツが出来たと言うだけで水泳協会とか陸上連盟の会合に参加していた。いつも月例の理事会が終わった後、「おい、仁科、ついて来い。」と言われてよく料亭に行った事があり、座敷の末席に座らされていた事を思い出す。メンバーの殆どが学校の先生で、市の教育委員会に出向していて、一般人を加えて理事会を開くのであるが、俺の顔が多少大人びて見えるので、多分面白がって連れて行かれたように思う。その時代は今のようなカラオケなんかは全く無い時代である。そこに居るのは、コンパニオンやホステスじゃなく、芸者さんと仲居さんである。伴奏は、三味線と、手拍子のみであり、「おい、仁科、なんか歌え。」と酔っぱらった先輩からよく言われたものである。そこで歌われていたのは、軍歌や大学の寮歌、そして民謡、小唄等である。俺は場を潰してはいけないので、それらの歌を家で練習しておき、その場で歌ったものである。その頃から俺の容貌とか考えが大人びて見えたので年寄りには受けがよかったのであろう。しかし俺が一番嫌いな言葉は『大人

になれ』と言う言葉である。俺にはそれが妥協しろと言われてるようにしか思えないのである。俺はこれからもずっとガキでありたいと思う。絶対に自分は自分である。

「チョッサー、俺、ウイスキー持って来ます。」俺は注文しておいたブラック・ニッカをすぐに自分の相部屋から持って来て、「今日はこれで。」とブラック・ニッカの蓋を開けたのだ。「お前そんな気い使わへんでもええのに。俺がお前を呼ぶ時は何も持って来なくてもええからな。」「すみません。だけどいつもいつも奢って貰ってばかりいたら俺も気い使いますもん。」「そうか、だけどそれは今日だけやぞ。」「はい、分かりました。」「チョッサー、基隆に行ったら、またメイメイ(美美)の所に行くんですか?」「岸本、お前何を言い出すんや。サロンがいる前やぞ。」チョッサーが少し顔を赤らめ、恥ずかしそうに「岸本、彼女とはかれこれ十年やのお。もうすぐメイメイは結婚するんやないかなー。腐れ縁やのお。俺はやっぱ高雄より基隆の女の方がええのお。サロン、雨の基隆と言ってなあ、結構雨が多いのや。人情も厚いし。女の肌もしっとりとしててなあ。それに引き換え高雄は南方だけあって開放的や。基隆の女と高雄の女とでは性格が全然違うんじゃ。もっとも基本的には台湾人は結構日本人に対して友好的や。それから、また台湾人を一括りにしたらいけないのや。昔、毛沢東の人民解放軍の八路軍に追われた、中華民国、国民党の蒋介石が台湾に逃げ込んできて、台湾が中華民国になったんや。それで、台湾を占領してしまったのや。だから蒋介石一派の事を外省人と呼び、元から台湾にいる人間を本省人と言うんや。そやからなあ、日本軍と戦った経験を持つ外省人は日本人の事を良くは思っていないんや。勿論台湾人の殆どが本省人なんやけど、台湾政府の偉いさん達は殆どが中国から逃れてきた外省人や。

日本の占領時代は日本政府の台湾での義務教育が徹底してたから、本省人の四十歳台以上の人達は大体日本語を話せるんや。メイメイもそうや。メイメイは台湾人やが、なんか彼女の事が外国人と思われへんのや。若い女もええけど、あいつだけは他人の様な気がせえへんのや。なんか『もう一つの家』に帰ったみたいや。」

[注] 1895年日清戦争に勝った日本軍が下関条約によって台湾を日本の領地とし、日本の統治時代が始まった。そしてその年から台湾に小学校が設立され、順次高等学校、大学校までもが設立されていった。そして義務教育でも欧米に負けない位の進学率であった。そしてこの教育制度は日本が主権を放棄した1945年以降も続き1948年まで施行された。

「船乗りちゅうのは、家に帰ったら、帰ったで一週間もしない内に、家で気い使い過

ぎて疲れてしまうんや。家族は俺がいない前提^{ぜんてい}で生活をしてるから、いちいち俺の事に構っておれん分けよ。それで俺も家族の者に気い使わせないようにせないけんわけよ。そやから俺も船が恋しゅうなるし、乗船したらしたで、また家が恋しゅうなるし、変わった生きもんやの一。」「サロン、さあ飲もうぜ。またなんでサロンは船に乗ったのかのう。俺は船が好きやが、なんか空^{むな}しゅうてな。もう俺の人生なんか変えられっこないしな。俺にはこの人生しかないんや。まー中毒やな。世間では乞食と船乗りは三日やったら止められんと言うんじゃ。金が無くても食事が出来るし、風呂も入れるし、増してや制服まで支給されるんや。」「チョッサー、何を言うてるんですか。俺なんかはチョッサー^{うらや}が羨ましくてならんのに。給料はええし、士官服は着られるし……。宇和島では商船乗りのチョッサーって言ったら、俺らの世界では結構自慢できますよ。それは贅^{ぜいたく}沢^{うらや}って言うもんですよ。」「それは分かっているんやが、まあ気にせえへんかったらそれでいいんやが、よお考えたら俺はまだ本当の船乗り^{うらや}に成れてないのかも知れんな。」「チョッサー、飲みなさいや。俺なんかそんなこと考えた事もないけん。チョッサーは頭がいいのよ。俺らは、これから息子や娘が中学や高校に行くから、そんな事考えている暇もないですわ。」

俺は結構酔いが回ってきたので先に失礼することにした。

本船はいたって順調に基隆港へ向けて航海している。既に静岡県の南端、御前崎をかすめるように過ぎて遠州灘を走っている。

朝食も終わり、トイレ掃除をしていたのだが、新造船というのに便器の水^{すいせん}洗に海水を使うので、便器の水洗部分から錆^{さび}が出始めている。いくらブラシで洗っても錆^{さび}が落ち



(御前崎灯台)

ないのだ。主調事にその事を伝えたら、「ストアーに『サンポール』が有るからそれを付けて洗えば。」と言われたのである。そのサンポールを吹きかけると^{たちま} 忽ち^{さびいろ} 錆色^{さびいろ}が

きれいに落ちたのである。

次は、キャプテン・ルームだ。

新しいシーツと枕カバー、雑巾を持って行き、部屋の中を片付けた後、新しい雑巾でテーブルや、ポート・ホールド(Port-Hold=船の丸窓)、ベアシンなどを拭いて床を箒で掃き、久しぶりのベッド・メイキングに取り掛かった。今日は毛布を扇型にしようと思っていたのだが、主調事に教わったことがなかなか思い出せない。

仕方なく筒型にすることにし、何とかやり終えた。そして、他のオッサー、エンジニア、局長、パーサーの部屋の掃除とベッド・メイキングをし終わった。

キャプテンの部屋だけは別格である。アイロンとアイロン台、霧吹きをキャプテンの部屋に持って行き、アイロンを掛けていたのだが、その時キャプテンが入って来て「ご苦労さん。」と言ってすぐさまブリッジに上がって行った。多分自分が部屋におればはかどらないと思い、出ていったのだろう。船長の名前は山村と言う。昔、帝国海軍の巡洋艦に乗っていて多くの戦友をなくしたらしい。

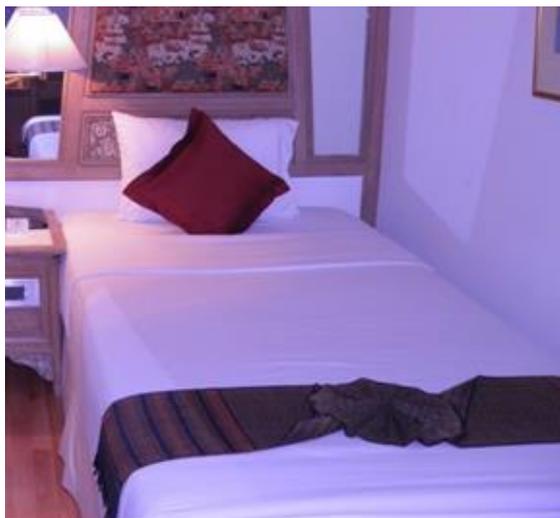
他の乗組員からはこの人こそが本当の船長だと慕われているのである。必要な時以外は殆ど無口らしい。アイロンがけが終

わり、主調事のところに連絡に行くと、主調事は俺を再度キャプテン・ルームに連れて行った。まずは俺にアイロンのかけ方を一から教えてくれ、手直しをした後、ベッド・メイキングももう一度やり直して、今度は雑巾がけが隅々までできているか、そしてごみの掃き漏れが無いかを細かくチェックした後、主調事自らが掃除して、丁寧に再度教えてくれた。

注意されて分かったのだが、俺の掃除は本当の掃除じゃなく、ただ掃除したように見せかけているだけだと思った。



(最新大型船の CAPTAIN'S ROOM)



(Bed Making)

今日の昼食は、ポークカツレツ、つまり『とんかつ』である。やっと判ったのだが、本船では昼食は肉類、夕食は魚が基本なのだ。俺の仕事は、キャベツのコールスローを作る事と盛り付けた。オヤジはケチャップ風味のスパゲッティと、リンゴの兎切り^{うさぎぎ}、スピナッチのソテー、コンソメスープなどを作っている。一方、主調事は、ポークのロース肉を 250 グラムずつ位に切って、筋切り^{すじ}した後、塩と胡椒を振り掛け、味をなじませると、延ばす為^{ため}に肉たたきで軽く叩き、小麦粉を付け、溶き卵にくぐらせ、パン粉をつけて揚げ始めた。やっと三人のコンビネーションが出来上がってきて、楽に食事の用意が出来るようになってきた。

サロン・ルームでは積荷が無事終了して、順調に目的港に向かっているために安堵感^{あんど}からか、士官の顔にもゆとりが出て来出しているのが見て取れる。食事をしていても「サロン、外地に行ってカスタム(税関)が来たらどう言うんか知ってるか？」声のでかいチェンジャーが話しかけてきた。「分かりませんが。なんというんですか?」「そりゃープリーズ、プリーズや。それから何か言われたら、イエスサー、アイアイサーや。」「それだけでええんですか? 答えなくてもええんですか?」「お前に答えられるかいな。ニコニコしてたらええんや。」俺はまだ外国に行った事が無いから「解りましたと。」だけ答えておいた。

俺の時代は学校の先生自体が戦前の鬼畜米英時代^{きちくべいえいじだい}の教育しか受けていなかったの、殆ど^{ほとん}どの教師が戦後勉強して、俄か^{にわ}仕込みの英語しか出来なかった。俺は小さい頃、ジープに乗った米兵の後を「ギミー、チューインガム。」と言って追っかけた記憶もある。中学時代はポール・アンカやドリス・デイ、エルビス・プレスリーの時代であり、俺も他の友達と同様、中学の時から金髪女に憧^{あこが}れていたの、奈良へ金髪女を求めてわざわざ東大阪の実家から遊びに出かけることが多かった。そして彼女たちにつたない英語で話しかけたりしているうちに、たまにアメリカ人からガイドを頼まれたりする事もあった。その為、学校の先生よりは絶対に英会話が出来ると確信していた。俺の勉強方法はあくまでも実践である。恥をかいてもいいのである。『笑ってごまかせ』である。ある時、5 フィート 6 インチの金髪じゃないが、ブルーネット(Brunette=[仏]栗毛)のスレンダーなイタリア系アメリカ人の、確か Jean Magnotti とか言う、ニュージャージー州コールドウェルの女の子に日本の歴史を教えて欲しいと頼まれ、大阪の白髪橋の図書館へ行って、百科事典と辞書を片手に勉強したものであった。俺には動機が不純であろうがなからうが、何をするにも動機が必要なのである。今でも彼女がアメリカに帰る時にしたキスの余韻^{よゐん}が忘れられないのである。

サロン・ルームの食事が片付いて、メスで食事をして鱸^{とも}を覗^{のぞ}いてみると、コートー・

マスターの白井さんが細いワイヤーの一方をハンドレールに縛り着け、もう一方の針に主調時からもらった鯛いわしを付けて、トローリングをしている。「白井さん、何を釣るんですか。」「釣れるかどうか判らんが、カジキでも釣ろうかと思っているんやが、本船は新しいからスピードが速過ぎるんや。だいたい8ノットから11ノット位やったら掛かるんやが、14.5ノットは速過ぎるんや。この速さなら釣れるとは思わないけどやってるだけや。」

コーター・マスターの白井さんは高知県の中村出身で結構おとなしい人である。「サロン、外地で遊びに行くときは、財布にはあまり金を入れない方がいいぞ。スリとか強盗が多いから気を付けろよ。それからいい服装とかいい時計なんかしていると、奴らは腕を切り落としてでも時計を取ろうとするからな。服装もあんまりいい服は駄目だぞ。それから女には気を付けろよ。結構病気持ちが多いから……。サードッサーに言って、コンドームを貰ついたらいいぜ……。台湾は比較的に安全やけど、それ以外の国でタクシーに乗ったら知らないうちに売春宿まで連れて行かれたりするからな。また美人局つつもたせや恐喝もあるし……。それから日本みたいに安全な国はないと言う事だけは知っておいた方がいいぜ。」

俺がせっかく海外に行けると喜んでいたので、白井さんから冷や水を浴びせられた。

コーター・マスターで高知県中村出身は彼だけなので、彼は一人である時が多い。彼は何か俺の事を心配してくれるのである。「白井さん、基隆キールンって言う所はどんな所ですか?」「俺は二年ぐらい前に上陸したけど、ポン引きが多くて、五月蠅うるさくてな、自由に観光できなかつたな。だから台湾ではあんまり陸おかの方へは行かんや。それで台湾ではいつもワッチを代わってやるんだ。だから他のコーター・マスターは朝帰りが出来ると言って喜んでくれるんや。」「白井さんは何で上陸して遊ばないんですか?他のコーター・マスターがあんなに次は台湾やって言って燥はしゃいでいるのに…。」「俺は遊ぶのが苦手やさかい、それとガキが三人と娘が二人いるんや。これからは大学へ行かさな社会では通用しなくなるやろ。沢山金ぎょうさんを家に仕送りしなかつたらいけんけえ……。大変やからのお。」

俺は持ち場のパントリーに戻って、食器の後片付けをした。ふと俺の手を見ると、なんと俺の手が知らないうちに綺麗きれいになっているんだ。凄いなあ、『桃の花』は!!

今日の夕食は鯛ぶりの照り焼きと鯨しじみの味噌汁である。主調事は1メートルはあろうかと言う鯛ぶりを捌さばいていた。鯛ぶりの厚皮あつかわをそぎ落として三枚におろし、2枚になった切り身をさらに縦に背の部分と腹の部分とに切り分け、それを約2.5センチ位に斜め横切りに格好良く切り分けていた。

主調事の包丁捌きはいつもながら見事である。酒、味醂、醤油のたれの入ったパイレッシュ(語源が解らない=ステンレス製の大きなバット)の中におろし生姜を入れ、そこに湯引きした鰯を漬け込んだ。それに少しの小麦粉を付けて、油を引いた、フライパンで焼き色を付け、そこにたれを流し込み、照りを付けるのである。



(パイレッシュ)

俺の方は、焼けた鰯の照り焼きを陶器の長方形の皿に盛り、はじかみと大根おろし、パセリを添え、イカ足のボイルを細かく刻み、キューカンバーのスライスとワカメを二杯酢で和えた物を小鉢に盛り付け、刻み生姜を上に乗せてサロン・ルームとメス・ルームに次々と運んで行った。蛸は砂抜きをした冷凍物で、殻が閉じているのだが、これをボイルすると、なんと全ての蛸の殻が開きだした。そして沸き出て来るあくを取りながら沸騰直前まで加熱させるのである。俺は今まで死んだ貝の殻は開かないと思っていたのだが、それが開くのである。

ご飯と蛸の吸い物も保温容器に入れ、やっと、俺の定位置のサロン・ルームで士官を待つことにした。

最初に来たのはチェンジャーだった。チェンジャーが突然話しかけてきた。「サロンは大阪出身やのお。大阪と言ったら8連隊や。昔よおー『またも負けたか8連隊』と言って、陸軍では一番弱かったんや。すぐに、『あかん、あかん、』て言てすぐに逃げよったからのお。」俺は少なくとも戦後生まれである。そんな事を言われても知る由もないのに……。俺が大阪生まれで、ほとんどの船員が田舎や漁村から出て来ているからひがんでいるのではなからうか。しかし船員の多くが四国生まれだとは俺も想像もしていなかった。東京とか大阪生まれの船員はごく稀なのだ。彼らの頭の中では、帝国陸軍よりも帝国海軍の方がステータスが高いと思っているのではなからうか。本船にはいまだに軍隊を経験した人が乗っているのです。戦後教育を受けた我々には、理解をしづらい面がある。

「チェンジャーは海軍ですか?」「そりゃー当たり前やろ。昔の海軍は今の船員みたいなことはないぜ。へなへなしてたらすぐにビンタが飛んでくるんやからのお。」「今でよかったですわ。家の叔父も海軍に行ってしごかれ過ぎておかしくなって帰って来ま

したもん。だけど俺は体力勝負やったら海軍に入っても少々の事ではへこたれませんよ。」

いまだに終わった戦争の事を話してどうなるって言うのか？人間の性^{さが}として、人を見下すことによって自分を満足させるのだろう。まあいいや、俺も気にしない。

今日も夕食の片付けが終わってから、ブリッジ^{のぼ}に上ることにした。本船は早、紀伊半島の潮岬^{しおのみさき}に差し掛かっていた。「失礼します。」「おおー、サロンか。もう直ぐやのお。サロン、掲示板を見たかね？バンスの事が載ってたやろ。バンスはいくら借りるんかね。」「いくら位がいいんですか？」「まあ、お前なら 2,000 元位でいいんじゃないの。高雄もあるからのー。」「じゃあ 2,000 元借ります。」「基隆はポンビキが多いけえ、気い付けさいよ。なんか台湾全体で 20 万人ぐらいいると言う噂^{うわさ}らしいぜ。まあ初めは逃れるのは無理だろな。」

[注] バンスとは、前借金(Cash Advance)の事であり、ポンビキとは横浜の伊勢佐木町界限で言うパイラー(Pilot)の事で客引きの事である。また台湾で 1 元とは当時の日本円で 9 円である。

「サロン、ええ事教えたるわ。マイルちゅうもんは緯度から来ているんや。時計と一緒に 1 度は 60 マイルや。それに 360 度を掛ければ地球の全周の距離や。つまり地球の全周は 21,600 マイルや。1 マイルは約 1.852 km やから計算してみろ。約 40,000km や。メートル法では、1m が地球の赤道から北極点までの距離の 10,000,000 分の 1 やから 4 倍したら大体同じやろ。」「ふーんそうなんや。チョッサーの教え方は学校で習うより解りやすいわ。」「サロン、こんな事は船乗りだったら常識で、みんな知ってる事やぞ。それと重さもこれから来ているんや。つまりやなー、1m、1m、1mの水が 1,000 kg で 1 トンや。簡単やろ。」俺は学校はで何故^{なぜ}こうゆう教え方をしないんだらうと疑問に思う。

俺はブリッジの外に出てみた。月夜に照らされてはいるが陸^{おか}が全く見えない紀伊水道を本船は走っている。聞こえるのは本船が走ることによって起るさざ波とエンジンの音だけである。初めての外国で起こるであろう出来事に対する不安と期待が入り混じり、何とも言えないぐらい俺の気持ちが不安定になっているのである。ブリッジに戻り「チョッサー今日は失礼します。」「今日は一杯やらんのか？」チョッサーはお酒をお猪口^{ちよこ}で飲むしぐさをして俺に促^{うなが}したが、今日は部屋に帰って寝ることにした。相部屋に帰ってみると、オヤジは 2 段ベッドの上で蛍光灯を付けて雑誌を見ているようだったが、俺は中国語を下のベッドで覚えることにした。

昨日はいつの間にか眠ってしまっていたようで、今日は5時に目が覚めた。4月の空はまだ薄暗いが太平洋の風は肌に心地よく、俺も船乗りになったのだなーと実感が湧いてくる。チョッサーの話では今は高知県足摺岬の近くを航行している筈である。艦のウィンチ・テーブルから表の方のデッキを見てみると、何やら魚らしきものが至る所に見受けられるのでデッキの方へ歩いて行くと何とトビウオではないか。本船が満船なので、足が入った(荷物で重くなったので、海面上に出ている部分が少なくなる事)のでトビウオがブルワークを超えてデッキまで飛んで来るのだ。近くでもトビウオが飛んでいる。魚なのにゆうに百メートルは飛んでいる。船に乗って海の上を航行していると何もないように見える海にこんなに新発見が有ろうとは今迄に思った事がなかった。

俺はサロンとメスの掃除を終え、オヤジが来るまでにサロンで所在無くテレビをつけてみた。あれ！テレビが映らない！本船は高知県の室戸岬を通過して足摺岬の沖近くのテレビ電波の届かない所を走っているためだ。今までテレビが見つからないことを経験したことのない俺にとって、世間の情報から隔離されたことはなかった。俺もやっとファックスが本船に付いている事の重大さが良く解るようになった。

[注]ファックスと言っても現代のようにすぐに印刷出来る物ではなく、感熱紙に一分間に数センチ位のスピードでしか印刷出来ないのも、共同通信の簡単なニュースしか載っていない。しかしながら日本の事をすぐに知る手段としてはこれしかないのも、乗組員のすべてがこのファックスを心待ちにするのである。

ここに来てやっと、日本から離れるんだなと言う実感がひしひしと湧いてきた。今日の朝食は、サバの味醂干しに納豆、味付け海苔、生卵、白菜の漬物といつもながらのメニューである。今日も一番先にやってきたのは、やはりチェンジャーだ。「サロン、バンスはいくら借りるんや？ようさん借りとけや。高雄もあるからな。」「俺は2,000円です。チェンジャーはいくら借りるんですか？チェンジャーだったら10,000円ですか？」俺も言われっぱなしなので、少しからかってみた。「アホか、そんなに借りてどうするんや。若いもんやあるまいし、3,000円よ。」「サロン、遊べるのは若いうちだけやから思い切り遊んどけや。結婚して子供が出来たら給料も思い通りにならんさかいな。」続いてキャプテン、サードエンジャー、サードッサーが入ってきてお互いが話し出してやっと話題が俺から逸れたのでほっとした。片付けが終わって艦を見ても、またコーター・マスターの白井さんがトローリングのワイヤーの側にいてワイヤーの先を眺めて

いる。「白井さん、どうですか掛かりましたか?」「やっぱり掛からんぞ。こんなに速かったら掛かるわけないもんなー……。それからサロン、手旗信号って知ってるか? 教えてるけん、来さいや。これは海軍の手旗信号やが、全部片仮名や。右手に赤旗、左手に白旗を持ってするんや。相手から見て片仮名に見えるようにするから、旗手は左右反対に出すんや、こうゆう風に大きくな。今はサーチ・ライトとか、電報のモールス信号とかが全盛やが、昔は、結構手旗信号で近くの僚船りょうせんに連絡したもんや。それからサロンは、釣りが好きか?」「俺は釣りは苦手で、網ですくうのだったらよく近所の小川でしましたけど。何しろ待っているのが苦手なんです。」「けどなあ、釣りは気の短い奴ほど、上手うまいっていうけどなあ。」「今度釣りが出来るところへ行ったら教えてやるけん。」「有難うございます。」

そのあと、士官の部屋掃除をして、昼食の用意である。今日はロースト・ビーフである。「サロン、今日は日曜日だからロースト・ビーフや。これはイギリス人の習慣で、日曜日に多めのロースト・ビーフを作って、残りを月曜日に食べるんや。」そう言いながら主調事は牛のもも肉の塊に塩、胡椒を擦り込み、鋳物製のオーブンに入れて焼き始めた。暫くして裏返してゆっくりと弱火で焼いて、金串を差し、肉の中の温度を確かめてそれを取り出し、アルミ・ホイルで包み、暫く寝かせていた。その一方でグレービー・ソース(Gravy Sauce=肉の焼汁にワイン、香味野菜、バター、固形スープ等で味付けし、コーン・スターチや小麦粉を使ってとろみを出したソース)を作っていたのでギャレーは良い匂いで溢れていた。俺はマヨネーズを作り、オヤジはポテトサラダの材料であるオニオンをスライスして水にさらし、キューカンバーもスライスして塩もみし、皮の付いたポテトと皮を剥いたキャロットはボイルして、ポテトはマッシュ(Mash=潰す)して、キャロットは銀杏いちようぎ切りにし、暫く冷まして缶詰しばらのグリーン・ピースを加えて、俺が作ったマヨネーズを入れて混ぜ、ポテトサラダを作った。

その後、オヤジはベーコンと、オニオン、キャロットのコンソメスープも作っている。コンソメ・スープと言っても、チキン等でスープの出汁だしを取るわけではなく、固形のマギーのコンソメスープ(Maggi Bouillon Cube=ブイヨンとはポトフ[仏]Pot au feuを作った後のだし汁。当時出たばかりの商品である)を入れるのである。誠に便利になったものである。あとは盛り付けだけだ。プレートに、水洗いしたレタスを敷き、その上に、ロースト・ビーフを並べ、それにグレービー・ソースをかけ、クレソンを添える。また右の方には、ポテトサラダにパセリを添え、四つ切にしたネーブルを置いた。

「サロン、どうや、なれたか?」またチェンジャーが最初に入ってきた。「なれるも何もまだ乗って半月やないですか。仕事はぼちぼち慣れて来たけど、まだまだ知らんこと

だらけですわ。」良かった。キャプテンやパーサー、局長が入って来たので、いたぶられなくて済んだのだ。

俺はロースト・ビーフの存在すら知らなかったが、柔らかくて実に美味しいのである。陸におればこんな料理を見る事すら出来なかつただろうと思う。昼食の片付けが終わって、俺は艦のスターボードから外をずっと眺めていた。本船は日向灘を越え大隅海峡の都井岬に差し掛かっている。まだ日本である。都井岬の深い緑に覆われた山の地形のなんと素晴らしいことか。それに少し緑がかった海と、本船のスクリュウから巻き上がる渦の白とのコントラストのなんと素晴らしいことか。

今日の夕食は、鱈の西京漬けと、卵の花と蛤の吸い物である。卵の花には鶏のささみ、芽ひじき、こんにやく、キャロット、干しシイタケ、鞘隠元を入れるのである。それに調味料として、酒、味醂、薄口しょうゆ、砂糖である。今日の夕食の仕込みは結構速く済み、夕食まで俺はやっぱり地球最大の自然である海を飽きることなく見ていた。

4時になったので配膳を済ませると、やっぱりチェンジャーが一番早かった。「サロン、今日は元気がええのう、なんかええ事でもあるんか?」「別にないですけど、だんだん船の生活に慣れてきたからやと思います。チェンジャーは台湾ではどうされるんですか?どっか行き付けの店でも有るんですか?」「無いわけ無いやろ。基隆はいいところやぞ。」「なんで、若い者が、高雄がええと言うのに、年寄連中は基隆なんでしょうね?」

「まあ気候の関係かな。別に俺だって高雄が嫌いなわけもでもないが、わいわい騒ぐ奴らには高雄はええが、俺らみたいな年寄はやっぱり基隆やな。基隆はやっぱりええぞ。サロンも陸に上がりさいや。」「はい、そうします。」「セコンド・エンジャーは基隆でどうするんかね。」「俺は上がりますよ。チェンジャーはどうします?」「俺も勿論上がるよ。」「セコンド・エンジャーが入って来たのでチェンジャーが話しかけていた。その後、他の士官連中が入って来たのだが、船乗りの話題と言ったら、他からの情報が少ないので大体次の港の事に集中するのである。夕食の片付けが終わったので、艦のデッキに出て夜の海を見ていた。6時前で既に暗くなっていたが、遠くを数隻の大型船が反対方向へ走っているのが解るのである。海と言うのは昼であれ夜であれ、船に乗った事が無かった俺にとって、凄く魅力的なものである。俺はその後海水の風呂に入って、相部屋に帰り、すぐさまブリッジに上がって行った。

「おおサロンか、コーヒーでも飲みさいよ。」コーター・マスターの岸本さんが俺の為にコーヒーを入れてくれるのである。「岸本さん、俺がやります。」と言ったのだが、「ブリッジでは気い使わないでええから。」と、取り合わない。「なあサロン、昔、台湾

が日本の領土やった時、日本で一番高い山が台湾の新高山にいたかやまで 3,997m、今の玉山ユイシャンやったんや。それから第二次世界大戦で真珠湾攻撃の信号が、『新高山上れ』で『トラ、トラ、トラ』は『我奇襲に成功せり』と言う信号やったんや。昔の台湾人は結構日本に同化している人が多かったのや。まー台湾に付いたらポン引きは多いけど、街中を歩いてみる事やな。俺ら船乗りはこうゆう所でしか、息抜きが出来んからの。「チョッサー、チョッサーは、なぜ台湾人を好きになったんですか。」「サロン、まーそんな事は後で判るからもっと為になる事を教えたるけん。部屋に戻らな帳面が無いから詳しいことはいえんけど、俺はなあ外国に行くたびに、その国の成り立ちを調べるんや……。元々中国は台湾の事を小琉球と言っつてな、沖縄の事を大琉球と呼んだんや。それで琉球の一部と思われていたんや。10 世紀から 12 世紀ごろ九州地方から倭人やまとんちゆう(日本人)が大挙して渡って来たらしい。まあ日本で平安時代も中期から後期やな。だいたい 14 世紀までは沖縄も統一されてなかったけど、14 世紀になって初めて琉球に国らしいものが誕生して中国の明に朝貢し、明から冊封さくほうを受けたんや。日本からの朝貢は唐の時代には途絶えていたんやけどな。冊封さくほうとはな、中国の王と主従関係を結び、中国の属国となる事や。また台湾が注目されるようになるのが中国が明朝(1,368~1,644 年)から清朝に(1,644~1,912 年)変わる頃ぐらいからや。それまでは住民の殆どが南方系(フィリピン、マレーシア、ミクロネシア等)の種々雑多な民族やったのや。

彼らには文字が普及しなかったから、あんまり歴史は解らんけど、狩猟とか、漁をして生活していたらしい。人口の増加による彼らの部族間の紛争が多く、成人の男として認められるために、ボルネオ島でも有ったような首狩りしゅつそう(台湾では出草)の風習もあつたらしいのや。ヨーロッパでは大航海時代になり、貿易の拠点としてオランダの東インド会社ほうこしやとうが澎湖諸島を占領した後、台員たいいん(台南)周辺を占領し、スペインは基隆周辺を占領したんや。余談やがヨーロッパ人で台湾に最初に上陸したのはポルトガル人や。その時あまりにも自然が美しいのでホルモサ (Formosa[葡]=麗しの島) と言ったそうや。火縄銃はそのころ台湾から種子島に渡来したようやなあ。そして彼らはそれぞれの植民地としてプランテーション運営のため、広東省、福建省から大勢の中国人を奴隷として入植させたんや。そして明の勢力が衰えかけてきた頃、他民族である女真族の勢力(清)が台頭して来るのにしたがってやな、明側勢力にいた鄭成功ていせいこうが台湾を拠点にして清に抵抗する為台湾からオランダとスペインを武力で追い出したんや。鄭成功ていせいこうは今でも台湾では『開發始祖』と呼ばれているのや。

しかし、やがて清側の攻勢に抗しきれずに滅亡するんやが……。また清の方は台湾の領有はしたけれど積極的に統治はしなかったんで、漢民族の貧民が大挙して台湾に

押し寄せたんや。また清朝は自国民が台湾に移住することを抑制するために女性の渡航を禁じたんで、台湾に定住した男性と原住民との混血化が進んで行ったのや。清は日本同様、鎖国政策を取り、日本との直接貿易（琉球は冊封のため除外）を禁じたから密貿易をする為に日本人を主体とする倭寇が中国沿岸を脅かし始めたのや。これには迫害された中国人や朝鮮人も加わっていたんや。そもそも倭寇とは13世紀に起ったモンゴル軍とその手先となった高麗軍によって起こされた元寇に対して、対馬や壱岐地方の大勢の日本人が殺害や拉致、略奪されたことへの復讐として、朝鮮の高麗に対して起こした暴行や略奪そして拉致された家族を取り返す事が主体やったが、高麗の政治が腐敗していたからそれに不満を持つ朝鮮人も加わっていたんや。しかし日本も南北朝時代(1,336年/延元元年/建武3年~1,392年/元中9年/明德3年)に入り、政府の統制がとれなくなった事によって、種々雑多の民族が倭寇に成済まして略奪行為を繰り返すことになったんや。そして台湾も中国人が主体の倭寇(清からはそのように解釈された)の拠点となって行ったんや。おお、もうこんな時間か。ワッチも終わりやな。サロン俺の部屋へ8時半頃氷を持って来といてくれや。」「はい分かりました。」

チョッサーは凄いな。俺らが高校で習った日本史や世界史と全然違うわ。これは探究心の違いやなと俺は思った。高校の歴史の先生は世界の潮流からその国を見ないで、その国の歴史だけを教えようとするから、その国の政権がなぜそのような判断を下したかが見えず、ただ為政者が偉人に成ったり、悪人に成ったりする事があるが、チョッサーのように細かく調べておればいろいろなことが解って来るんだなと思う。

「失礼します。今日は有り難うございました。俺は目から鱗ですわ。俺なんか何を習っていたんですかねえ。」「サロン、俺はなあ、船に乗って、やる事が無いからこうゆう事に興味を持っているだけや。こんなことは家に帰ったら出来へんぜ。嫁さんや家族とも話しをせないけんし、近所付き合いもあるし。船に乗っていたら、今日はこの本を読もうとか、明日はこの本を読もうとかを自分で決められるからな。船では仕事の時以外は何をしようが自由やからな。」俺はチョッサーとコーター・マスターの岸本さんにそれぞれダブルとシングルの水割りを、そして俺はシングルを作って小さな宴会が始まった。チョッサーはいつも乾き物のおかきやすめ、サラミ・ソーセージ等をロッカーに入れているのでつまみには事欠かない。

「サロンは彼女がいるんか?」「いない事は無いけど、俺は一人前になる迄は別に何も考えないことにしてるんです。」「そうか、若い時はその方がええな。田舎では早く結婚して落ち着けなんかよく言われるけど、それはやな、結婚したら生活の為に忙しくなって、あんまりいろんな事を考える暇がなくなって一生懸命に働くし、世間体もいいか

らなあ。結婚なんか結婚したいと思っただらええし、思わなかったらせんでもええし……。」「チョッサーは人を本当に好きになったことがあるんですか？」コーター・マスターの岸本さんが語気を少し荒げてチョッサーに問い質した。「そりゃー人間だったら人を好きにならん事は無いぜ。俺だってうちの女房が好きで好きでたまらんかった時もあったぜ。しかしやな、それ以降女房以上に魅力的な女が現れない方がおかしかろうよ。岸本だって八幡浜の嫁さんと結婚しただろ。東京や、大阪の都会的な女に魅力を感じた事は無いんか？ないとは言わせんぜ。なー岸本、飲みんさいや。」チョッサーは少しニヤーつとした目つきで岸本さんの方を見た。「チョッサー、俺らは船乗りですよ、内地に来て女房が本船に來れなければ、そりゃー寂しくなって遊んだりしますよ。でもねえ、それはそれ、単なる浮気ですよ。気晴らしですよ。やっぱり家庭が大事ですよ。チョッサーはのめり込み過ぎるんですよ。」「岸本、俺は女と付き合う時、ただ遊びだけでつき合う事は出来んのか。相手も人間やしな。いろんな話を聞いているうちに相手の私生活や境遇なども知りたくなるのか。それが人間やないか。そりゃー相手に遊ばれたこともあるよ。だけどそいつが何でそうゆう事をしたのかも知りたくなるんや。俺が変わっているのか、ただ遊びで女と付き合う人間が変わっているのかよう解らんわ。ただお前の場合、嫁さんの方がいいと思いながら遊んでいるわけやし、俺はいろんな女、つまり人間に興味を持っているだけや。なんか変な話になって来たな。岸本、飲もうぜ、さあ。」

俺はだんだんチョッサーの性格が解って来出した。

「それから聞いた話やけど、チョッサーの息子さん、大阪の公立大学に受かったんやて、それも造船学部。やっぱり頭のええ子は違うわ。俺とこの子なんて勉強が嫌いで外で遊んでばっかりしてなかなか家に帰ってこないらしいわ。どないしたらええんもんやろか？」「俺の息子は船乗りが嫌いなんや。陸で働きたいらしいんや。しかし息子も船の事から頭が離れんかったんやな……。それから息子の教育は全部女房に任しているから、俺には子供の教育なんか分からんよ。」「チョッサーの娘さんも全然チョッサーに似ずガイに別嬪さんで頭もええから、ほんと羨ましいわ。」「そんな事は無いって。岸本の子供らもその内勉強しだすから気にせんでもええぜ。『親が無くては子は育つ』って言うやないか。放つといてじいっと見てた方がええ。あんまり勉強せい、勉強せいなんか言わん方がええ。」

俺には関係のない話になって来たので中座する事にした。そしてサロンルームを通過して、ぶらっととものデッキに出てみた。夜風がすごく気持ちよい。酔いも手伝っているのかも知れないが、こんな気持ちいい風は船乗りしか味わえないと思う。本船はスクリュ

ウから白い渦をあげながらただ黙々と走っている。こんなデカイ船を休みなく動かしている船のエンジンって凄く丈夫なんだなーと思う。多分今頃は奄美大島の沖合ぐらいだろうか。

今日の朝食はオートミールである。そして、主調事はスクランブル・エッグ、これをフライパンにバターを入れ、溶き卵に牛乳と塩を加えてあっという間に作り、ガスの火力を強くしてフライパンでベーコンをパリパリするまで炒めていた。オヤジも昨日から塩を入れた水に浸しておいたオートミールに牛乳を加えて鍋でじっくりと煮込んでいた。俺はプレートに、レタスを敷き、主調事が作ったスクランブル・エッグ、炒めたベーコン、四つ切にしたトマト、バターと塩で味付けし、ソテーしたスピナッチ、お湯で戻し、塩とバターで味付けしたインスタントのマッシュポテトを盛り付けていった。スープはもちろんコンソメスープである。昨日、今日とイギリス式の食事である。俺の口には一寸、合わないのかも知れないが、こうゆうのは慣れであろうか。

いよいよ明日の今頃には台湾についている筈である。今日の朝のサロン・ルームにはサードッサーが一番早く入ってきた。サードッサーは痩せっぽちなのだが、食事は乗船して以来残した事が無い。「サードッサー、明日はどうされるんですか?」「そーだなー、サロンはどーするんや?」「俺は初めてやから絶対陸に上がってみたいです。」「サロン、台湾と言っても外国やから、気い付けないかんぜ。ただ食べ物は安くてうまい店もあるから街をブラブラして来たたらええわ。」「サロン、俺が連れて行ってやろうか。」「チェンジャーが話に加わってきた。「いや、いいです。チェンジャーみたいな偉い人に連れて行ってもらったら悪いです。」「そうかー。サロンに女遊びを教えたろかと思っちゃったんやがな。」チェンジャーと一緒に陸に上がったら、後で何を吹聴されるか分からないので、丁重に断る事にした。その後オッサーがたて続きで入って来たので、オートミールをよそったり、お茶を出したりの本来の仕事で、彼らの話には加わずに済んだのである。実際このオート・ミールの評判は悪かった。

その後、パントリーでの食器洗い、トイレ掃除、オッサーの部屋掃除やベッド・メーキングの後、ギャレーに戻る事にした。今日の昼食は、中華の焼そばである。オヤジは材料の豚肉のスライス、筍の薄切り、白菜、水で戻したきくらげと干しエビ、干しシイタケ、薄切りの蒲鉾、イカの拍子切り、ピーマンの角切り、ニンジンの銀杏切などを仕込んでいた。俺がギャレーに来たときは殆ど終わっていたので、手伝うまでもなかった。

艙のデッキを見ると、またコーター・マスターの白井さんが魚釣りに使う毛鉤をテグスに10本程付けているので「何に使うんですか。」と尋ねると、「内地に帰った時アジ

やサバを釣るのに使うんじゃない。」と言うのだ。まさかこんなに沢山の毛鉤など要らないんじゃないかと思い、「こんなに沢山毛鉤を付けるんですか？俺ら池や川で釣るときはだま騙し(疑似餌)はしなかったけど、餌と針はひとつやったのに……。」「まあ見ときんしゃい。後で解るから。」白井さんのワッチは0~4だが、だいたい朝食後はデッキに出て色々な事をするのが楽しみみたいだ。

主調事が上がってきた。早速中華のそばを大きなビニール袋から出し、大きな中華鍋で油を入れ炒めだした。こんな大きな鍋を事も無げに振るなんて事は俺には10年早いと思う。主調事は炒めあがった中華そばを別の大きな鍋に移し替え、同じ中華鍋にまた油を入れ、オヤジが仕込んでおいた材料を豚肉、イカ、筍、干しエビ、干しシイタケ、きくらげ、蒲鉾、野菜と一緒に炒め、それに鶏がらスープを加え、塩、化学調味料、オイスター・ソースで味付けした後、水溶き片栗粉でとろみを付け、香りづけにごま油を入れて仕上げた。一般に言う八宝菜だ。主調事は、どんな料理でも簡単に作ってしまうので、一見簡単そうに見えるが、実際やってみるとそのどれもがなかなか難しい。

サロン・ルームには、やっぱりチェンジャーが一番早く入ってきた。「今日は中華焼きそばですが、量はどのぐらいにしますか？」「普通でいいや。」「足らなかつたら言ってください。」主調事は俺にその盛り付け方を教えてくれた。大きな鍋に入れておいた炒めた焼きそばの上に、先程の八宝菜をかけるのだ。そして最後にウズラをボイルして皮を剥いたものを一つ乗けて、お皿の脇にお湯で練った粉からしを添えてチェンジャーのテーブルに運んだ。その後、続々とオッサーが入ってきたので、余りチェンジャーと話さなくて済んだのだった。

食事の片付けの後、俺もメス・ルームで食べたのだがそのおい美味しいこと！

明日は台湾なので、3時半位まで昼寝をすることにした。昼寝というのは疲れが吹っ飛んで、すこ凄く気持ちがいいのである。

船内放送で「明日基隆に入港します。明日朝まで使う以外は、たばこ1カートン、酒類はウイスキー1本、または酒一升瓶以外は全部シールしますので、シール・ボックスまで名前がわかるようにして持って来てください。」急にパーサーの声が聞こえた。

シール・ボックスは、一回から2階に上がる階段の下にある。俺もウイスキーの残っている1本を一階の下にある俺の部屋まで取りに行った。なんと、オヤジがウイスキー8本とたばこ3カートンを持って上がって来るではないか。オヤジはいつい何時タバコやウイスキーを飲んでいるんだろーか？一人で寂しく飲んでいるのだろうか？ますますオヤジの性格が解らなくなった。

昼寝の後、相部屋からギャレーに上がると、オヤジがさわら鱻の切り身に塩を振り、乗組

員 23 名分を長い金串にさしていた。俺も大根おろしを作り、盛り付ける皿をギャレーのテーブルに並べ、アサリのお吸い物のお椀をサロンと、メスに運んだ。小鉢はボイルした薄切りの蛸たことスライスしたキューカンバーの二杯酢和えである。俺はいつも通り、飯釜から、ご飯を保存容器に入れ、これもサロンとメスに運んだ。そしてオヤジが焼いた鱈さわらに、大根おろしとハジカミを付けサロンに運んでゆくと、またしても一番乗りはチェンジャーだ。

「サロン、いよいよやのお。いい事教えといてやるわ。基隆に行ったら絶対ポンビキに捕まるからのお。女代は、高くても一晩 1,200 元、ショートで 600 元や。思い切り遊んでこいや。」「チェンジャー、俺は女遊びなんかしませんよ。ただ街を見てみたいだけですから。」「そうか、まあじっくり見て来たらええわ。」別にチェンジャーはただ単に俺をからかっている分けじゃなくて、元々の性格、話し方がこういう感じの人間で、俺も全く嫌っているわけではない。「チョッサー、いよいよですなあ、明日からは羽をいっぱい伸ばせますなあ。」「チェンジャーもいつもの娘こですか。」「解ちよるやないですか。」そこへキャプテンが入ってきた。キャプテンの威厳いげんは相当なものである。チェンジャーとチョッサーの話が急にまじめな話に変わった。そうこうする内にみんなの夕食が終わり、俺はその後片付けを済まし、風呂に入った後、いつも通りまたブリッジに上って行った。

「失礼します。」「おおサロンか、今日は絶対来ると思ってた。」「昨日の続きを聞かせてもらおうと思って来ました。」「俺も今日は自分のノートを読み返したわ。台湾の鄭成功が作った反清勢力もわずか 20 年余りで 1683 年に清に降伏したんや。しかしその当時台湾では、マラリヤや Deng 熱などの疫病が風土病としてあって、また毎年襲う台風などもあり、清の国は台湾を統治する意味が無いとしていたと思われるんや。そして台湾の原住民の事を化外けがいの民と呼んでいたことからその関心度が想像できるんや。それから台湾の事を語る上で、中国との関係なしでは語られへんのや。そやから中国と関連付けて話したるわ。

中国とは元々、漢民族の国や。その中国を 1644 年、明に代わって女真族のち（後で言う満州族）が 1644 年から 1912 年まで支配したのが『後金』つまり『清』の国や。なぜ後金と言ったかは 1115 年～1234 年まで中国の北半分を女真族が支配してたからや。その時の国の名が『金』やったんや。満州族は元々が黒竜江省の哈爾濱ハルビンの松花江近辺に住んでいた民族で結構信義に厚い民族やったと俺は思っているんや。しかし清の末期の 1840 年、清はイギリスとのアヘン戦争で負け、1842 年に南京条約を結ばされて、香港の割譲や、主要港の開港、つまり此処やなー、上海シャンハイ、寧波ニンポー、廈門アモイ、福州フウチョウ、広州コウシュウ。そ

の他イギリスの関税自主権や治外法権を認める条約なども結ばされ、アヘンの中国への輸出も事実上の解禁になったんや。それに加えて、1844年にフランスと広州でほぼ同様の不平等条約、つまり^{ワンポア}黄埔条約、同じくアメリカともマカオ郊外の^{ぼうか}望厦村で^{ぼうか}望厦条約を結ばされたんや。また1857年に第二次アヘン戦争(アロー戦争)ではイギリス軍とフランス軍に、広州、そして天津を占領され、イギリス、フランス、ロシア、アメリカの連合に天津条約を結ばされたんや。それによってな、首都北京での公使の駐在、中国でのキリスト教の布教、中国の内陸河川の自由航行、アヘン貿易の公認、イギリスとフランスへの賠償金の支払いなどを認めさせたんや。また、1860年にロシアが調停に入って、北京条約を結ばされたんや。これによってやな一、イギリスへの九龍半島の割譲、天津の開港、中国沿海州のロシアへの割譲、中国人の海外への渡航許可等を認めさせたんや。この渡航許可と言うのは紛れもなく、中国人を奴隷として中国から他の国に送り込む狙いがあったと想われるんや。またロシアへの沿海州割譲も、ロシアがその後、朝鮮半島、日本を植民地化するための拠点作りやったんやろ。

この頃は飢えた欧米列強が、アジアと言う大きな皿に盛られた美味しそうな豪華な食いを奪い合うような時代やったんや。ヨーロッパでは紀元前から負ければ奴隷となるような戦争が各地で続き、血で血を洗うような戦争が繰り広げられていたんや。日本もやがて欧米列強の植民地になるのは時間の問題やったんや。

そんな中イギリスとの独立戦争に勝利したアメリカは、ヨーロッパの列強に負けまいとして、1853年には第13代大統領のミラード・フィルモアはペリーに命じて2隻の蒸気船と、2隻の帆船、合計4隻の艦隊を横須賀沖に停泊させ、日本に開国を迫ったんや。サロンも聞いたことがあるやろ。

『泰平の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も眠れず。』上喜撰とは蒸気船に掛けているんやが、船の数え方も一杯、二杯と数えるのや。ここでやっとな開国と言う言葉の意味が出てくるんやど。開国を迫ると言う事は開港を作れと言う意味や。開港とは貿易が出来る港の事や。解るか？」



(ペリーの横須賀上陸)

チョッサーは地図帳を開いて熱弁をふるっていた。

「江戸幕府には既に清がアヘン戦争で敗北して不平等条約を結ばされ、領土を取られ、揚句に膨大な賠償金を取られた事が伝わっており、欧米列強の武力に^{おび}怯え、調印せざる

を得なくなったんや。これを機に最初は長州だけだった尊王攘夷論に薩摩、ひいては肥前や土佐までも巻き込んで薩長土肥連合に発展してゆくんや。

その為、井伊大老が強硬策としてこれに反対する勢力を封じ込める為に安政の大獄と言う施策を行い、吉田松陰はじめ多くの勢力を伝馬町の牢屋敷に投獄したんや。それに対して反対勢力が桜田門外の変で井伊大老を亡き者にし、当初尊王攘夷派は長州藩のみとなっていたが、関門海峡で起こった長州藩による砲台から英仏蘭米の四国艦隊に向けた砲撃事件でいやと言うほど軍備の格差を見せつけられ、上陸され、すべての砲台を破壊されたんや。これを機に長州だけであった尊王攘夷派が日本の将来を憂慮した薩摩、土佐、肥前藩を巻き込んで討幕連合へと発展していったんや……。さあ、明日は基隆や。ワッチも終わりやけど今日は酒盛りは止めとくぜ。」「はい分かりました。」

チョッサーは明日から始まる基隆での荷役の事を考えて、やはり今日は早く寝るみたいだ。